北星学園大学文学部北星論集第48巻第２号（通巻第55号）（2011年３月）・抜刷

北海道民間説話の研究（その８）

塚本長蔵と口演童話［研究ノート］

阿　部　敏　夫

北海道民間説話の研究（その8）

塚本長蔵と口演童話［研究ノート］

阿部敏夫

（一）

目　次

はじめに
第1節　塚本長蔵の生涯
第2節　北海道の口演童話について
第3節　塚本長蔵の活動
第4節　塚本長蔵の童話教授細目
第5節　「塚本長蔵」の民間説話「桃太郎」受容
まとめ

はじめに

日本における口演童話活動は、一八九五年（明28）厳谷小波が、京都の小学校で話をしたのが始まりである。そして、一八九七年岸辺福雄「教室童話」がこれに続き、次いで一九〇三年久留島武彦が、「お伽倶楽部」を創立した。これらの活動がもとになって「公開お話会」の発足となり、全国巡回口演などが行われるようになった（注1）。

北海道における口演童話活動については、内山憲尚・坪谷京子・小野三男治（みおじ）諸氏の論考と塚本長蔵1周忌追悼集等に紹介されているが、その活動内容・口演童話の意図と口演内容その影響について、本格的に考察されている論考は管見するところない（注2）。

その北海道の口演童話研究の手掛かりとして、今回は比較的資料が残されている塚本長蔵（生涯、活動、童話教授細目、民間説話受容などに）に焦点を当てて考察した。

第1節　塚本長蔵の生涯

塚本長蔵の生涯に関する資料は、下記の資料Ⅰ、Ⅱである。

資料Ⅰ「塚本長蔵年譜」

（塚本長蔵追悼刊行委員会編『塚本長蔵追悼　一九八二年（昭57）一周忌にあたって』32ｐより）

・明治39年7月10日　留萌町大字留萌村一線四番にて、父栄蔵母こよの次男として誕生
・大正9年3月　上川郡下川村上名寄尋常小学校卒業
・大正11年3月　上川郡下川尋常高等小学校準訓導

キーワード：塚本長蔵　口演童話　奇味談語

・大正12年4月　札幌師範学校本科第一部入学
・昭和2年3月　同校卒業
・昭和2年4月　上川郡愛別尋常高等小学校訓導
・昭和5年3月　札幌市山鼻尋常高等小学校訓導
・昭和7月3日　林みさをと結婚
・昭和13年8月　長男章人誕生
・昭和15年2月　長女紀子誕生
・昭和20年3月　札幌市山鼻国民学校退職
・昭和20年6月　江別市日藤商事勤務・社会教育活動に入る
・昭和21年1月　「明朗学校」出版
・昭和21年6月　「笑ふ昔噺」エルム社
・昭和22年6月　「ユーモア学校」新日本文化協会
・昭和23年1月　「小使さんの日記」出版
・昭和24年3月　「さかさま人間学」出版
・昭和25年1月　「落語人間学」出版
・昭和29年4月　藤女子短期大学助教授（保育科）
・昭和30年2月　「青年弁論読本」出版
・昭和45年11月　「奇味談語」出版
・昭和47年2月　講演より帰宅後体調急変・南札幌病院に入院（脳軟化症の診断、旬日後希望して退院
・昭和47年5月　南札幌病院に再入院、一時重態
・昭和48年1月　在院中に「斜蟹説法」出版
・昭和48年9月　同じく「童話北海道」出版
・昭和49年8月　在院二年半を経過して退院、ふたたび執筆活動をはじめたが、やがて視力が衰えだす
・昭和56年10月11日　家の中で転倒、札幌脳神経外科病院に入院、昏睡状態がつづく
・昭和56年10月19日　逝去
・昭和56年10月22日　告別式、法名「開蔵院釈豊徳」

資料Ⅱ「塚本長蔵つかもとちょうぞう**」**

（大井源一郎一九九三、大阪国際児童文学館編『日本児童文学大辞典』第1巻大日本図書株式会社484ｐより）

一九〇六年（明39）年7月10日～八一年（昭56）年10月19日。口演童話家。留萌市生まれ。札幌師範学校本科卒。札幌市内の山鼻小学校に勤務。その間に札幌放送局ＪＯＩＫ子供会主宰。戦後藤女子短期大学勤務のかたわら社会教育家、童話家として各地で口演。学生時代「青い鳥の会」（24）結成、のちに口演童話の会「札幌童話会」（29）結成、三浦一、小野三男治らと活躍。著書に『明朗学校』（46）『小使いさんの日記』（46）『ユーモア学校』（47）『奇味談語』（71）

塚本長蔵は、一九二七（昭2）札幌師範学校本科卒業後、愛別・札幌で小学校訓導として一九四五年（昭20・3）まで勤務している。一九二二年（大11）下川準訓導、師範学校在学を加味すると教育機関に23年間関与している。また、その間札幌放送局・寺院での子供会活動にも関わっている。しかし、塚本長蔵が本格的に「口演童話」に関わるのは太平洋戦争後である（注3）。一九四五年（昭20）から、「口演童話」家として一九八一年（昭56）まで活躍した。その間36年になる。戦前と合わせると59年になる。塚本長蔵の全生涯が「口演童話」の創作、普及等に関わったことになる。

一九五二年（昭27）４月藤女子短期大学保育科「言語」科目担当非常勤講師として就任し（注４）、一九七一年（昭46）３月退任迄同大学に勤務した。同時に、北海道内全域を口演童話・講演活動等を行った。また活躍の場も広く（寺院・学校・社会教育施設等で）、多数の著書（注５）も刊行した。上記のように塚本長蔵は昭和期の北海道文化形成に大きな影響を与えた。

第2節　北海道の口演童話について

以下の資料Ⅰ、Ⅱからその概観を探ることが出来る。

資料Ⅰ．「口演童話・童話会」

（坪谷京子昭和54年４月「児童文化の足あと　１．口演童話・童話会・紙芝居」、にれの樹の会編『北海道の児童文学』北海道新聞社、116－118ｐｐより）

北海道においては、大正六、七年の頃、小樽で、石島正人（望峰）を中心とする「グリム童話会」というのがあり、中村、石橋、由利などの人々が活動を始めていた。

札幌では大正八年、札幌の師範学校の学生たちで童話会を発足し、名前を「桃太郎会」とした。指導者は飯田広太郎、佐藤義清、前田一郎などの面々で、リーダーは多田金市、野呂襄などであった。この「桃太郎会」の誕生の契機となったのは、同じこの大正八年に、東京から久留島武彦が巡回口演で来札したことによるものである。

この「桃太郎会」はこの後、大正十三年に「桃太郎会」と「青い鳥」の二つに分かれたが、昭和四年には再び合併して「札幌童話会」となり、戦後は「銀の舟童話会」と改名されたのである。

「桃太郎会」が大正十三年に「桃太郎会」と「青い鳥」の二つに分かれた時、民間には「七つ星童話会」（田中政之）や「札幌子どもの友会」（塚本長蔵）が生まれた。そして昭和初頭には「アカシアお伽会」（長内明）なども誕生した。

終戦後、各師範学校は教育（ママ）（注：学芸）[1]大と名前が変わり、札幌師範学校も、教育（ママ）大札幌分校となった。このため「札師童話会」が「銀の舟童話会」と名前が変わった、内容はそのままで活動を続けた。他の師範学校も同様で、教育（ママ）大函館分校は「赤い鳥童話会」、旭川分校は「小熊童話会」、釧路分校は「まりも童話会」、岩見沢分校もまた童話会を作るなど、学生による童話会が大いに活躍したのである。

童話会の内容もだんだんと多彩になり、戦前は口演童話や紙芝居に、児童劇や舞踏も加わり、幻燈やクイズなどまでまじって子どもたちを楽しませたようである。戦後はこれに人形劇やシルエットが加わって、子どもの人気を呼んでいる。

こうした発展の中で、戦前、戦後を通して、口演童話実演者としては、塚本長蔵、小野三勇治、三浦一などが最も有名である。特に、塚本長蔵、小野三勇治の二人は口演童話一筋に生き、現在でもまだ口演童話を続けている貴重な存在である。残念な事に、塚本長蔵は、近年病におかされ、口演を断念している。この二人、塚本長蔵と小野三勇治の口演の特徴を、昭和初期の頃、当時の庁立札幌高女の江原校長が〝塚本は落語調で軽妙洒脱、小野は講演調で謹厳華麗〟と評したと言う話であるが、ラジオもテレビもない時代には、こうした口演童話は特に僻地の子どもたちにも、大人にも大いに歓迎されたようである。

この他、戦前の函館には「おてんとさん童話会」というのがあり、海老名礼太などが活躍していたという。

童話会はその性格上、内容や、指導者や、経済問題や、その他もろもろむずかしい所があり、各地どこでも長続きはむずかしいようである。札幌においても、童話会の変遷が多く、色々な会が生まれては消えている。ひととき盛んであった「子どもの友会」（塚本長蔵）もいつしか消えていた。そこで昭和二十二年三月に、小野三勇治が新しく「第二次子どもの友会」を発足させたのである。また、三浦一は同じ頃「北海道児童文化会」を作った。どちらも、その名前だけは現在そのまま残っているということであるが、殆ど活動はしていない。

そのほか旭川では、佐々木明や佐藤秀昌が「旭川童話会」を作り、また、釧路の坂本亮、女満別の小鮒寛、十勝大津の横山真、などを中心とする「北海道綴方連盟」の活躍の中に「紙芝居実演活動」などもあったようである。

資料Ⅱ

（小野三男治一九七九「札幌の初期児童文化運動と私」、にれの樹の会編『北海道の児童文学』北海道新聞社、212－215ｐｐより）

大正八年、将来教員になるためにと、札幌師範の附属小学校高等科三年に入学したが、この年は札幌の、いや北海道の口演童話界にとっては忘れられない年である。

その一つは、当時日本一の童話家といわれた、久留島武彦先生が来道されたことであり、他の一つは札幌師範学校に、実演童話団体として桃太郎会が誕生したからだ。

翌年、師範学校に入学できた私は、学業よりも、教員になるために、本格的なお噺の仕方を身につけたいと考えるようになったが、この夏、帰郷してきた東京の叔父（当時東京帝室博物館学芸部勤務）が、交際の広い人で、私の希望をきき、つてはいくらでもあるから、何時でも出てこいと励ましてくれた。

好機はすぐ来た。二学期早々学校の開校記念相撲大会に選手として出場した私は、手首を骨折した。怪我は大したものでなかったけれど、それを口実に休学、すぐ上京した。

それから三年、偶然会った禅宗の僧侶に、お噺の勉強は心の修業と、大衆話術の研究にあるとさとされ、参禅と、童話を中心とした説教、講談、落語などの勉強に夢中になっていた私だが、大正十二年春、母校から戻ってきたらとすすめられ、ちと道草を喰いすぎたと気づいてまた学生生活に戻ったが、身につけた話術と、桃太郎会責任者が入学同期の連中だったので、すぐに会員に迎えられた。

また、このころは、札幌で子供のための文化活動が盛んになった時で、私を復校させた師範の先生が西本願寺の有力な檀家だったために、日曜学校の手伝いをおしつけられたり、北海タイムスの記者で、子供雑誌『七つ星』を独力で出していた田中政之さんが、新たに七つ星童話会という実演団体をつくり、私は、多田金市、加清保、岩城武夫、伊藤博美などという先輩の先生方と共に参加させられた。

坪谷京子・小野三男治両氏の文章から塚本長蔵が活動するようになった時代的背景がわかる。また、教師として積極的に口演童話活動に関って行ったことがわかる。

（四）

第３節　塚本長蔵の活動

一九八二年（昭57）10月発行『塚本長蔵追悼　一周忌にあたって』こふな会刊行委員会』から、その活動（人物像を含めて）について５名の手記を通して紹介したい。

①塚本君を偲ぶ　落合敏雄（同期生）

塚本君と言えば、眼鏡を掛けた丸顔のやさしい笑顔がすぐ目に浮かぶ。それだけ私達の忘れられない、お話のうまい、落語の上手な、私達を笑わせ楽しませてくれた塚本君である。

塚本君と私の最初の出会いは、札幌師範受験の時で、受験地旭川の旅館であった。その時古屋英松君も同宿であったことを覚えている。札幌師範では二年から卒業迄の三年間同じ甲組、君は副級長として級長小野三男治君を助けて級の中心的人物であった。二年生の頃既に君は話術に関心深く、弁論部員として活躍し、又当時有名であった久留島武彦氏の指導を受け童話が上手であった。君は才能に恵まれ音楽にも優れていたが、又、落語にも造詣が深く、自ら塚長亭跳馬と名乗り、時に教室でもクラスメートの希望で、俄か仕立ての高座で、落語家の手振り口振りよろしく皆を笑わしてくれた。二年生の時であったと思うが、私は君と一緒に狸小路の帝国座に、東京からの落語家の口演を聞きに行ったことがある。その時の出演者の名等は忘れたが、丁度札幌祭の時で、場内が混むのを予想してか、座員が舞台の上から大声で「皆さあん、年に一度のお祭りですから前へ詰めて下さあい」と呼びかけていた。年に一度のお祭りだから前へ詰めろとはどういう理屈だと君が言い、二人で笑ったことを覚えている。その後校内の弁論大会で、或は青い鳥会という子供にお話を聞かせる会等で、君の話術が益々洗練されて行くのを見た。

卒業してからも君はお話の先生として有名になり、やがて全道各地から招かれ講演をするようになった。終戦間もない頃だと思うが、私が富良野に在住している時、富良野小学校を会場として塚本君の講演会があり、私も聴きに行ったことがある。中々堂の入ったお話ぶりで感心した。そしてその君が私の家に立寄ってくれ、一泊してくれて嬉しかったことは忘れられない。

君は後に教職を退いて専ら童話や講演に力を入れ、各地を廻られたこと、又君は昭和三十年藤女子短期大助教授になり話方の指導に当られたということも聞いた。この様に全道的に活躍された君だったが、後年はからずも脳軟化症で倒れた。その後君の努力で奇蹟的に回復し、同期会に出られる程になり私達も喜んでいたのであったが、不幸にも病革まり遂に不帰の客となられたことは誠に残念である。茲に往時を追想し、心から君の御冥福を祈る。

②長さんと青い鳥　吉岡栄（同期生）

俺は何も出来ない、せめて子供の青い鳥にでもといって間もなく、青い鳥童話会を結成した。既に桃太郎童話会もあったが、長さん企画のこの会は童謡も児童劇も入れられ、長さん自身の舌切雀や二人浦島の劇に感動した同志有志が多数参加活躍し盛会そのものであった。

札幌に転じるや市内の先生有志を募って札幌童話会を結成、土曜日の午後にはどこかの学校で童話会が持たれ、また子供の友会を創り、公会堂や時計台等で演出。放送局の子供の時間には会員交互で放送。紙芝居の研究までも組織した、長さんの青い鳥は大きく羽ばたきつづけた。

退社後は社会教育家として活躍、仏心の篤い長さんは、各地の寺の

（五）

報恩講等に招請され、善男善女老人達を喜ばせる一方、文筆にも優れ、教育問題を人間味豊かに書いたユーモア学校など、当時の教育界に大好評だった。

③畏友塚長さんを憶う　宇高隆輔（同期生）

彼は弁論の雄であり、実演童話の研究においても、在学中から青い鳥童話会を主宰するなどして、広く社会的にも活動した。これはまた児童劇の研究となり、児童劇の創作脚色、演出などに卓抜した才能を発揮した。ＪＯＩＫコドモグループという児童劇団を組織し、札幌放送局専属と思われるような活動をしたことは周知のとおりである。彼が昭和のはじめ、ＪＯＩＫが放送した、ラジオ体操のピアノ伴奏をしたことを知る人は少ないだろう。

彼にはユーモアを主題にした多数の著作がある。その取材の範囲の広さ、宗教、哲学から、故事、川柳、奇談、珍談と、その読書の広汎、博覧強記、人生経験の深遠に敬服するのである。彼は常にポケットに手帳をしのばせ、市井の雑事など見聞きして、心にふれるものは即刻メモし、後日の種にするとも語った。また玄人の域と思える落語の修得については、学生時代から読書はもとより、帝国館や札幌劇場に落語の席がかかれば、必ず入場して、ダルママントを頭からかぶり、口演をノートして要領の会得に努めたとも聞いた。天分もあったがまた努力の人であった。

④塚本君の文化活動　津田甫（同期生）

私達が二年生になったとき、彼は「青い鳥童話会」を組織した。それまで師範学校には「桃太郎童話会」があったのだが、新しい児童文化を進めるため、この会を誕生させたのである。私も誘はれてそれに入ることにしたが、ほかに喜多君、古屋君、中野君、一年下では三浦君などがいた。この人たちと塚本君の5名はすでに故人になってしまった。今では私には彼等の思い出が懐しい幻となって浮んでくる。「桃太郎童話会」をやっていた小野三男治君もすでにない。数年前先輩の水沼与一郎先生とみんなと一度会合したいと話し合ったが今となってはすでにむなしい。

「青い鳥童話会」ではよく学校巡演をやった。童話は塚本君を中心に喜多君・古屋君で、対話劇はこの三人がやり、中野君（ヴァイオリン）と私（ピアノ或はオルガン）が伴奏した。帰ってからは塚本君の下宿でよく反省会をやった。若気のいたりで、学校を無断で欠席して学校公演をやり、一網打尽捕えられ処分を受けたこともある。

卒業して彼は下川小学校へ、私は上磯小学校へと南北に別れて就職したが、二年後彼も私も札幌へ就任した。その頃はラジオがもう放送されていて、放送局はＪＯＩＫのプログラムは全部こちらで編成しなければならなかった。

塚本君はその音楽的な器用さで、毎朝ラジオ体操のピアノ伴奏をしたが、朝が早いのによく続いたものだと思っている。しかし何といってもその真髄は児童劇であった。ＩＫ児童劇団の指導者として大活躍をした。私はＩＫ唱歌隊の指揮者とし、又ＩＫサロンオーケストラの指揮者もしていたので、児童劇には伴奏者として共演した。

⑤青い鳥童話会と塚本長蔵さん―故三浦一君に代って―　佐藤光吉（同窓　後輩）

当時塚本長蔵さんは札幌師範の弁論部の主将で、全道の弁論大会に優勝した。その塚長さんが、青い鳥童話会を創設した。札幌師範には古い伝統を持つ桃太郎会があった。何故に別派の青い鳥を創始するに

至ったか、当時の事情は私は知らない。恐らく自由な発表の場を欲しかったのであろう。音楽部の中野さん剣道部の古屋さん色々な人が仲間になった。話術の本流を求めるならば桃太郎会は活弁調で塚長さんは落語にその拠点を求めた。

厚い眼鏡をかけ、丸々と小肥りの塚長さんが口演する『戦場の小鳥』には、勇壮な戦場に小鳥の巣があって、チチチッと啼く無心の小鳥に注ぐ兵士の愛情に思はずホロリとさせられる話術の機微をつかんで絶妙のものがあった。童話口演に志す誰彼もが東京高師大塚講和会の編んだ〝実演童話集〟に吸い寄せられた。

童話の集いに音楽をそして童謡を童謡舞踊を締めくくりに童話劇をと多彩なプログラムは塚長さんの独壇場であったと覚えている。札幌子供の友会なるものがあって、大きなバックアップを得ていた。放送局、新聞社、百貨店等の有志で、行事のプログラムは素晴しい色刷りで、丸井のマークが鮮明に印刷されてあった。因みに筆者は同級三浦一の勧誘に依るもので、青い鳥がどの様なメンバーか、或いはどの様な構成であったかを確かめても居ない。

当時仏教日曜学校が市内にいくつかあって、童話口演を志す者は、何処かの日曜学校に所属した。塚長さんは豊平の経王寺、吉岡、沢内の両先輩は北八条信行寺、私もその一人で、教師待遇の居候であった。塚長さんは音楽にも長じ劇作などを得意とした。豊平で親鸞劇を上演するとてその背景を描く様に依頼をうけ、下宿の部屋一ぱいに紙を拡げ徹夜して画きあげたことを覚えている。絵具1函を御礼に貰ったことであった。赤や青のセルロイドに電気光線で舞台を証明すれば下手な絵も荒野原に見えてどうにか役に立ったかに感覚している。

時に武者修行と称し近郊の小学校に押しかけ、童話や寸劇を上演して喜んで貰った。御礼金を固辞して、月寒餡ぱんを大きな箱に一杯貰って食べ切れずに下宿まで持帰ったことも記憶に残っている。

塚長さんはお得意のピアノで、ラジオ体操の伴奏者として、長くＩＫスタジオに通った。教職を辞して後、本格的に社会教育の講演者として、全道をかけ巡り、話術にかけては第一人者として高名であった。

（七）

第４節　塚本長蔵の童話教授細目

資料（『教育と人生　第二年第九号　札幌童話会　特輯号』昭和９年９月15日　北邦教育協会発行９－14ｐｐより）によると塚本長蔵の課題意識と計画的な取り組みを以下のように窺い知ることが出来る。

「童話教授細目」作製の必要とその要點

これは私が大分以前から考えへてゐた事でありよりよりその資料を集め、旦それを便宜の項目に分類してみたりしてゐる事であるが、何分相當の廣範圍に亙る事でもあり、雑務に追はれて、この一事にのみ没入する事を許されないので未だに蝸牛の歩みを続けてゐる。しかし私の頭の中には不完全ながらもこの仕事の完成がどうやら見透しついてゐる様に思はれるので、何れ諸君の前にその全貌をさらけ出して御批判を仰ぐ日もあらうと思ふ。ただ今回は、かうした記念すべき機会でもあるので、限られた行数に於て唯その骨組みだけを御覧願つて、色々御示教戴ければ、やがて生れ出る者の為に幸せだと考へたのである。

一

『童話教授細目』だなどなど妙な言ひ方である。小学校に於ける

『算術教授細目』『読方教授細目』などに倣つてこんな名前をつけたのであるけれども、別に童話を他の学科並みに一定の教授時間をとつて授けるといふのではない。

それでは何かといふと一体子供といふ者は洋の東西、時の古今を問はず童話の嫌ひな者は一人もない筈で、嫌ひ所か熱烈に求めて止まらぬもので、先づこれだけは議論の余地のない所であらう。そこで、どんな先生が、どんな小学校に奉職なさつたにせよ、全然子供から童話の註文をうけぬ筈もなく、その註文も度重さなれば、一つや二つのうろおぼへの地蔵さんに団子を喰はれた話ぐらゐはして聞かせない先生もないわけである。

先づ普通の状態から言へば、修身の補充例話として、或ひは何かの時間の余つた時、或ひは生徒がある作業を終わつた後の慰労の意味等で童話が語られる様である。

上級と下級では自らそこに違ひもあるわけで、上級になればどうしても学科に要する正味の時間も詰つてくるので、あまり童話を聞かせてゐる暇もない事になるが、下級の場合には随分教材によつて、又その取扱方によつて時間を余し、そこで穴塞ぎに時間つなぎに童話でも聞かせようかといふ事になる場合があるのである。

これを時間的に考へてみると、全学年を通じておそらく一週一時間平均位にはなると思ふ。（これは必ずしも纏つた一時間を指すのではない）私の着眼はここにあつたのである。

二

一週一時間として一ヶ月に四時間。

一年を十一ヶ月とみて四十四時間。

六ヵ年間には二百六十四時間になる。一時間に一つ宛の纏まつた話を興へると見て、その数は二百六十四話となる。

四

縦には学年によつて分類し、横には童話の種類、性質によつて分類しておく。しかし学年の境界線、つまり縦の境界線は余り厳重にしなくてもよいと思ふ。先づ低・中・高と大よその所で三分しておけばよかろう。

教授細目といつても、特定の時間をとるのではないから『第何週、何々』といふ風には表はさない。

学年に応じて、その部分から適當なものを選択して興へばよいのである。

五

学校にはそれぞれ特殊な催しがある或ひは開校記念日、校庭制定記念日、其他歴史的に特殊な記念日。

それに一般的には桃の節供、端午の節供、陸海軍記念日、義士講、乃木会或ひは校内童話会などなど名前をつけて七夕童話会をやつたり、新学期の進級祝ひの童話会とか、学年末のお別れ会或ひはクラス単位で行ふ学級会の様なもの、かうした機会に必ず先生のお話といふものは、重要なプログラムの一部に加へられるのである。かうした場合の話材もやはり『童話細目』の中に考慮して置くのである。

（但しさうした場合に特殊な話材を必要とする事もあらうから必ずしも既製のお膳立てにとらへられる必要はない、よろしく使ひこなすべきである）

（八）

六

次に話材を何処に求めるかといふ事である。大体これを箇条書にしてみよう。（一つ一つの箇条についての説明は極めて不完全であるが紙数の都合上止むを得ない）

1．日本神話及日本童話

代表的なものは是非一通り聞かせておきたい。

2．各国の口碑童話

興味の多いのは何といつても口碑童話である。ドイツのゲリンムやノールウエーのアスビヨルンゼンの童話集などは誰しも判る所のものであるが、他にも英国童話の「巨人退治のジャック」「トムサム物語」其他各国の口碑童話の中でも有名なものは一通り選びたい。

3．各国の芸術童話

ドイツのハウフの童話、デンマルクのアンダアセンの童話、ロシヤのトルストイの童話、フランスのベロール及ドーノアの童話、イギリスのワイルドの童話等。

4．各国の古典童話

ギリシヤの神話、北欧神話を初め、イソツプ物語、アラビヤ夜話等の中からも相当の話材を求め得られると思ふ。

5．宗教童話

印度童話の如きは無蓋の話題の宝庫と呼ばれているが、近頃は佛教童話全集、佛典説話全集等によつて簡単に我々も話材を手に入れる事が出来る。基督教童話についても同様である。すべて宗教童話はその教訓的なる点に於て補助教材となるものが非常に多いことは言ふ迄もない。

6．名作物語

（九）

童話以外の名作物語の中でも、児童の人生的教養の一助として、感受性の非常に強い小学校時代に於て、是非聞かせておかねばならぬものが数多くあらうと思ふもつとも名作物語の中には非常なる長篇物もあつて、その一つを聞かせるだけでも悠に数時間をとるものもあるが、さうしたものは、その全体を聞かせずとも梗概を聞かせるなり、その中の興味ある一部分を抜粋するなり、それによつて児童が、ある刺激を得て、彼等の生長後の読書選択の指針となるだけでも結構だと思ふ。その大体を列挙してみると、竹取物語、八犬伝、水滸伝、西遊記、ロビンソン漂流記、ピーターパン、「クオレ」中の諸話、ガリバー旅行記、小公子、母を尋ねて三千里、奴隷トム、フランダースの少年、黒馬物語、家なき子、十五少年漂流記。

7．東西偉人の伝記

これも詳しい歴史的な事実といふよりはむしろある一つの逸話を中心にして、童話的興味の中に聞かせたい。

8．其他

この外にも日常の新聞雑誌の童話欄等で意外な拾ひものをする事もあるであらうし現在の童話作家の発表なさる作品の中からも珠玉に等しいものを見出す事もあろう。

以上で極めて不完全ながらその要項を申述べたつもりである。

塚本長蔵の実践的体系的な「細目」が記述されている。この塚本の学究的姿勢は戦後の著書一九五五『青年弁論読本』にも反映されている。塚本の口演童話活動の理論的背景を窺うことが出来る。

第5節　塚本長蔵の民間説話「桃太郎」受容

民間説話「笑い話」などを素材にして落語や口演童話を塚本長蔵は語っている。著書の題名を『奇味談語』としているのも塚本長蔵の民間説話に関わる意識を垣間見ることが出来る。五大日本昔話の一つである「桃太郎」話を事例にして考察する。

塚本長蔵の昔話「桃太郎」

桃太郎鬼ヶ島に行かんど、腰に黍団子をつけ、出かけたれば、犬と雉子たといで、「鬼ヶ島へ宝をとりに」「腰につけたるは何ぞ」「日本一のきびだんご」「一つ下さいお伴申さう」それより両人を伴につれ、すたすたと行く。向ふより猿立出て「桃太郎さん何処へ行きねん、お前の腰のは何でえす」「日本一のきびだんご」「一つくんねんし」としやれるに、定めて猿も如才はあるまじと一つやれば「アァうまい、もう一つくんねんし」とこれも食ひて「アァうまかった。何時でも来ねんし」（寿々葉羅井）

寓話といえば、先ず何はさておいても、大御所桃太郎殿に敬意を表するのが物の順序と考えて、最初に桃太郎話を持って来た。

猿は人間よりも毛が三本足りない、従って智恵は智恵でも猿智恵と笑われてはいるものの、何といっても動物中での智恵者とは万目の認めるところ。小噺作者がこの童話を観た場合、何よりも先きにそれがピンと来るらしい。さてこそ、桃太郎に関係ある小噺は、多く猿のひとり舞台になっている。

黍団子のおかわりを請求させたり、「お伴申そう」と言わないで「いつでも来ねんし」と赤お尻をくるりとむけさせたり、何れも猿ならでは出来ない芸当である。

二度の駈

桃太郎鬼ヶ島の手柄に味をしめ、又おもひ立つ旅衣、こんどは龍宮へでも行って見んと、腰には例のきびだんご、すかりにいれてさげて出る。道にて猿にであへば「桃太郎どの桃太郎どの、どこへござる」「龍宮へたからとりにまいる」「腰につけたは何でござる」「日本一のきびだんご」「一つくださいお伴まうさう」桃太郎すかりより一つ出し、猿へとらせければ、猿手にとり、つくづく見て「モシ小さくなりやしたの」（聞上手）

桃太郎を龍宮へ遠征させた思いつきも面白いが、それよりも、お伽の世界にも食糧難があるかと、破顔一笑させられる。

食い辛棒の猿公にとって、キビ団子の量は何よりも問題。「鬼ケ島遠征当時にくらべると、ハタサテせち辛い世の中になりましたなぁ」と、そぞろに昔を懐かしんでいる。我々が、戦時中、白米時代を懐かしんだのと同じようなものである。

桃太郎

久しぶりで桃太郎、又鬼ヶ島へたから取りに行くとて立出ると、例の役者が出て「モシモシおまへの腰につけてござるはわんだ」といへば「日本一のきぢだんごさ」「ハイひとつくださるお伴申さう」（独楽新話）

犬のワンと、キジとサルをもじって言っただけの事。言葉の上の洒落に過ぎない。

（一〇）

桃太郎

むかしむかしの桃太郎は鬼ケ島へ渡り、もとでいらずに多くの宝をとって来たげな。これほど手みじかな仕事はない。しかし犬と猿と雉が伴をしたとある。おれもきやっらをこまづけるがよいと、かの日本一のきびだんごをこしらへ、腰につけて行く。

向ふの岩ばなに猿がいる。まずしてやったりとうれしく、くだんの団子をぶらつかせ行き過ぐるを、猿よびかけ「おまはどこへござる」「おれか、おれは鬼ヶ島へ宝をとりにゆく」「腰につけたは何でござる」「これは日本一のきびだんご」猿うかぬ顔にて「こいつうまくないやつだ」（鹿の子餅）

第二世桃太郎の出現。やはり黍団子だけは忘れていない。道端に猿をみつけて「まず、してやったり」と喜んだまではいいが、近頃の猿は昔と違って、味覚の発達しているのはご存じない。

「お腰につけたは何でござる」

「さればサンドイッチ」とか「ノリ巻き弁当」と来てもらいたいところ。それが依然として、昔同様「きびだんご」では浮かぬ顔になるのも無理がなかろう。

この小噺にしろ、前の「二度の駈」にしろ、共にお伽の世界を、ポット現代の真只中へぶちこんだ所におかし味があるのである。

桃太郎

桃太郎、鬼ヶ島に渡り、宝物をしたたか取って帰り、頃しも大みそか、掛乞山の如く詰かける。中にも猿や雉兵衛、鬼ヶ島へ出立の入用金千両の證文持参し「元利揃へて千二百両、サァたった今、耳を揃へて受取りませう」といへば、桃太郎びくともせず、かの延命小袋を取出し、打出の小槌にて、「ソレ千二百両」と打って見ても

（一一）

一文も出ず「ハテ不思議な、出ぬといふ事はない筈と又打てども何も出ず。桃太郎しばらく思案し「これは鬼ヶ島より取って帰り、大切な品なれど、そちにやるぞ」（千里の翅）

この小噺、最初は桃太郎が借金取に悩まされる場面、しかもその債権者が、雉や猿とあっては、如何に戯作とは云え、何となくいやな気持ちである。もっと何とか想像のめぐらしようがなかったものだろうか。

中程へ来ると、何とはなしに一寸法師の話が連想されるが、何といっても、この小噺の山は最後にある。私は始めてこの小噺に出っくわしたとき、思わずふき出した。役に立たなくなった打出の小槌に「大切な品なれど」と勿体をつけてくれる桃太郎が、恰度五才か六才のいたづら小僧が、饅頭のアンコロの部分だけホジッテ食って、皮の所を兄や姉に、気前よくくれたりするのと同じに思えて嬉しかったのである。

落語に―あるお殿様が鍼に興味を持ち、迷惑がる家来をつかまえて背中にハリを打つ。ところがハリの先が折れて、身体の中に残ってしまう。そこで殿様が「そのハリの先は高価な物なれど、そちにつかわすぞ」と仰った―という話があるが、それと全く同じ狙い所と思う。

（塚本長蔵　『奇味談語』より抜粋）

伝統的な昔話伝承の域を脱して自由奔放に塚本桃太郎話を語っている。他の昔話についての考証は本稿では行わないが同様なことが文献上は言える。

まとめ

1．今回の考察を通してわかることは、塚本長蔵は日本の口演童話活動の影響を受け、そして塚本自身なりに受容して北海道全域に口演童話を普及したことである。また、塚本長蔵の豪放磊落な人物像が少し明らかになったことである。

2．本稿は、上記の通り塚本長蔵研究の中間報告である。換言すれば〈塚本長蔵に於ける「北海道民間説話」受容・発生研究〉のための〈北海道の口演童話研究〉の背景と資料についての糸口が分かり始めた段階である。

3．今後の課題は、塚本長蔵と同時代に口演童話活動に参画した例えば、三浦一、小野三男治両氏を始めとする人達や内山憲尚編『日本口演童話史』（文化書房博文社一九七二）に氏名と若干のコメントのみが紹介されている（「1．札幌市（8名）、2．小樽市（4名）、3．函館市（1名）、4．旭川市（2名）」）人達の詳しい紹介とその活動内容を明らかにすることである。

4．上記の作業と分析を通して『北海道口演童話史』『北海道児童文化史』（仮）の研究そして、「北海道民間説話の研究」へと発展させたい。

謝辞

北海道立図書館、北星学園大学図書館、谷暎子氏、黒井茂氏（資料提供など）に大変お世話になりました。

尚、本研究ノートは、北海道史研究協議会例会の研究発表資料（二〇一〇年6月）を書き直したものです。

注

（1）北海道外の研究については資料編3、132P参照。

（2）「本格的に考察されている論考」とは、「北海道全域の口演童話についての総合的（歴史的内容的地域的検証と分析）な論説」という意味である。そのための先行研究としては、谷暎子氏の二〇〇一・10『占領下の北海道の子ども文化〈一九四五－一九四九〉』札幌市こどもの劇場やまびこ座、鈴木喜三夫氏が北海道子どもの文化研究同人誌『ヘカッチ』第6号二〇〇一、日本児童文学学会北海道支部機関誌『ヘカッチ』第3号二〇〇八に「札幌子供の友会」の結成・目的・活動について論究している論説がある。

（3）一九二七年～一九四五年の間は師範学校生、訓導として口演童話家として活動して居たことは当然であるが、昭和20年（一九四五）6月、資料1の「社会教育活動に入る」という記述から「本格的に」という文言を使用した。

（4）『藤女子短期大学30年・藤女子大学20年記念誌』による。

（5）資料編参照。

資料編

1、塚本長蔵著作目録（目次紹介）

一九四一年（昭16）9月『教壇随筆　純情学校』（弘学社）

目次　純情・生徒　教室常会、純情、教へ子、物の価、守り札、鉢合わせ、慈善ポスト、あてが外れる、作法実習、物を言ふ、お見舞ごっこ、おませ、学級経営異変　純情・訓導　良寛先生、ウイット、春のどか、壁の墨、さしみ、追ひかけられる、自己を裁く、不運、教室御難、真中の人、ツカハラダルマ、連想、年末明朗譜　純情・校長　阿弥陀校長、施米風景、関取校長、失言、童心校長、幻滅、炊出し、一

（一二）

茶校長、お蔭、一級上俸、花見孝行　純情・教壇　妻の心配、避難訓練奇譚、ある親馬鹿の話、学芸会近し、愉快な綴方、答案ナンセンス、あげ足、太郎の話、口癖、視学過剰難、ある会話、批評語辞典、洒落、最大級、諺国民学校視察報告　著者への花束、刊行者として

一九四六年（昭21）1月『明朗学校』（新日本文化協会）

目次　時間割表、無邪気、オットドッコイ、お祈り、前ならへ、老校長と機関士、小さな事件、平和、珍短文、焼鳥、木馬、悩み、学芸会余話、宿命、オハジキ、あら探し、柿、公人・私人、関心事、暑苦しき訓示、受験生と母、入学前の経歴、入学式雑観、種を蒔く、往診料、眠り病奇聞、馬謖を斬る、血、卒業写真、気の毒風景、山さんと地理、川さんと算数、燈台もと暗し、小使い受難、かはいゝ話、馬を射る、背中

一九四六年（昭21）6月『ユーモア学校』（新日本文化協会）

目次　一　小さな謝恩会　二　赤面　三　昇給　四　涙　五　虚弱児　六　つまらんこと　七　販路拡張　八　奴凧校長　九　防寒頭巾　一〇　細心　一一　美談　一二　難産　一三　受持往診　一四　先生教育　一五　へきえき　一六　遵奉者　一七　無信心　一八　ボヤッとした顔　一九　老師招待　二〇　神経をつかふ　二一　参観者　二二　珍問答　二三　義侠校長　二四　呆心訓導　二五　一輪ざし　二六　居候　二七　品切れ　二八　アルファベット訓導姿態　二九　評点　三〇　物をいふ　三一　磁石　三二　人目忍んで　三三　運動会プロ漫話　三四　一念　三五　個性観察簿に拾ふ　三六　収賄事件異録　三七　無雑作　三八　写生　三九　椿油

一九四七年（昭22）6月『笑ふ昔噺』（エルム社）

一九四八年（昭23）1月『小使さんの日記』（新日本文化協会）

目次　一年生、大きくなったら、時の記念日、しんたいけんさ、遠足、増産、大川先生、画鋲のあと、水害、花、切抜き、水泳、マメ、水でひやす、大掃除、キックボール、おつかひ、お別れ、手紙、落し物

一九四九年（昭24）1月『さかさま人間学』

一九五〇年（昭25）1月『落語人間学』

一九五五年（昭30）2月『青年弁論読本』（北海青年社）

目次　**第一章　はじめに**　一　弁論はいつから始まるか、二　青年弁論の特色　**第二章　資料の選択と応用**　一　材料はどこにあるか、二　譬喩の種類　1　仮作物語　2　事実　3　東経　4　学説　5　偉人や聖人の言葉　6　格言　7　和歌・俳句・川柳・道歌　8　警句　三　資料の生かし方　イ　個性、ロ　真実　ハ　実感　ニ　身辺　**第三章　原稿の組み立て方・作り方**　一　ごちそうの配列　二　くりひろげ型とまとめ型　イ　演繹法　ロ　帰納法　三　組み立て方のさまざま　1　枚挙法　2　設疑法　3　比較法　4　逆手法　5　漸層法　四　変化　五　目で読む文章、耳で聞く弁論　六　正しい文章　七　ウットリさせる部分　八　原稿を作る順序　1　粗筋　2　肉づけ　3　推敲　4　時間　5　いいわけ不要　6　発端と終結　**第四章　練習の仕方**　一　練習の順序　1　原稿は何回も読む　2　大きな声　3　休けい　4　次第に原稿から離れる　5　他人の前でやれ　6　批評してもらえ　7　他人の弁論を聞け　二　努力の効果　三　平常の練習法　1　小さな問題をとらえて　2　同好の士が集まって　3　名原稿の暗誦　**第五章**　一　音声のさまざま　二　音声と感情　三　音声ははっきり　イ　発音　ロ　アクセント　ハ　言葉ぐせ　ニ　早口　ホ　語尾　四　声の鍛錬　**第六章　態度・ゼスチュアの心得**　一　登壇　二　礼　三　足　四　眼　五　手　六　服装　七　ゼスチュア　八　壇上の動き　第七章　話し方について　一　話は一本の川　二　間　三　緩急　四　抑揚　五　迫力と魅力　**第八章　聴衆の研究**　一　野次　二　拍手　三　群衆心理　四　会場　五　司会者の責任　**第九章　おわりに**　一　咄弁の雄弁　二　学んでカブレルな　三　雄弁は総和なり　附録　全道青年弁論集

一九七〇年（昭45）11月『奇味談語』（山音文学会）

目次　奇の巻　浮世病院　内科、外科、整形外科、眼科、耳鼻咽喉科　（イ）耳ノ部（ロ）鼻の部（ハ）咽喉の部、歯科、皮膚科、肛門科、精神科　味の巻　川柳閑話　物も言いよう、涙、独り者、嘘、暑いこと、ことわざと川柳　談の巻　愚筆漫筆　ツメ言葉、五十歩百歩、過不足の論（一）過の部（二）不足の部、すべからく笑うべし、野糞綺談、循環譚、やきもち物語、北海道地名洒落問答　語の部　小噺草紙

（一三）

桃太郎、浦島、かちかち山、猿蟹合戦、花咲爺、舌切雀、金太郎、鼠の嫁入、若返りの水、九年母、ぬえ退治、狩人と熊、和尚と小僧

一九七三年（昭48）1月『斜蟹説法』

一九七三年（昭48）9月『童話北海道』（山音文学会）

目次　とんでん先生と豆小使い、とんでん先生と土方、とんでん先生とけんちく列車、熊と兄弟、アイヌ犬の勉強する学校、とんでん先生とラッパ、とんでん先生とメガホン、黒田長官とリンゴ、オンコは語る

和顔愛語…子供の物語…ニコニコ顔とよい言葉

エルム社の絵本よみもの

2、塚本長蔵の活動記録

児童劇団ＪＯＩＫコドモグループを組織　札幌放送局専属と思われるような活動をした。

昭和のはじめ、ＪＯＩＫが放送した、ラジオ体操のピアノ伴奏をした。

（宇高隆輔）

3、日本口演童話研究目録

・**有働玲子**一九九二「大正期の口演童話―下位春吉・水田光を中心に―」、『聖徳大学研究紀要第25号（Ⅰ）』195－206ｐｐ

・**渡辺良枝・松川利広**二〇〇七「久留島武彦と奈良に関する史的考察―寧楽女塾といさがわ幼稚園を中心に―」、『奈良教育大学紀要第56巻（1）』71―87ｐｐ

・**大竹聖美**二〇〇五「朝鮮・満州巡回口演童話会―児童文学者の植民地訪問―」、『東京純心大学紀要9』1－12ｐｐ

・**森上史朗**二〇〇一「創刊一〇〇巻を記念して東基吉・くめのことなど…『鳩ぽっぽ』から『口演童話』まで」、『幼児の教育100巻』4－12ｐｐ

・**磯部孝子**一九九三「名古屋と周辺地域の口演童話活動―明治末から昭和前期まで―」、『中京大学　文化科学研究4（2）愛知の児童文化研究1』17－29ｐｐ

・**磯部孝子**一九九五「仏教日曜学校の成立と口演童話活動」、『中京大学文化科学研究6（2）愛知の児童文化研究3』79－93ｐｐ

・**川北典子**一九九六「口演童話に関する史的考察―京都とその周辺地域を中心に―」、『日本保育学会大会研究論文集（49）』688－689ｐｐ

・**田中貴子**一九九九「保育活動における『お話』の目的―口演童話を手がかりにして―」、『日本保育学会大会研究論文集（52）』514－515ｐｐ

・**田中貴子**一九九九「保育活動における『お話』の可能性について―口演童話を手がかりにして―」、『兵庫教育大学紀要．第一分冊、学校教育・幼児教育・障害者教育19』153－162ｐｐ

・**谷出千代子**二〇〇二「『口演童話』の描写に関する一考察―大正年間の出版物を中心にして―」

・**木村太郎**二〇〇七「倉澤栄吉の口演童話論の内実考」、『学芸国語教育研究（25）』14－24ｐｐ

・**前川芳久**二〇〇八「小池長（たける）再認識のために―遺品展をきっかけに―」、『中京大学図書館学紀要（29）』23－33ｐｐ

（一四）

［Abstract］

A Study of Hokkaido Folk Tales No. 8：A Study of Chozo Tsukamoto and Oral Storytelling

Toshio ABE

The oral storytelling of nursery tales in Hokkaido started under the influence of a movement organized by Sazanami Iwaya and Takehiko Kurushima in 1895 (Meiji 28). However, the full-scale study of details of their activities, objectives and contents of their storytelling and their influence has not seemed to be accomplished. In order to begin the research on oral storytelling in Hokkaido, I have focused on Chozo Tsukamoto, whose materials remain more than the others'. In one of his books,Kimidango, a collection of nursery tales that he told, he wrote the folktale "Momotaro" not in accordance with traditional format, using his vivid imagination freely. How Tsukamoto adopted the folklore from Hokkaido will be a theme of further study. Through the research, I have learned that Chozo Tsukamoto was influenced by the national movement of oral storytelling, adapted it in his own way and spread it all over Hokkaido.

Key words：Chozo Tsukamoto, Oral Storytelling, Kimidango